

# 現代日英語の語彙の構造

伊藤 栄子

## 0. 序

ある一定の範囲に用いられる語の集合を語彙という。「あの人は語彙が乏しい」とか、「シェークスピアの語彙は膨大だ」などというときは、その範囲がある個人の話しことばまたはその人の作品に限られた場合であるし、鹿児島方言の語彙、八丈島方言の語彙といえ、一つの地域社会の言語に限られた場合である。意味分野を限って、親族語彙、身体語彙、色彩語彙などという分類が行われることもある。さらに広くある言語全体についても、そこに用いられる語の集合をこの言語の語彙という。以下、「語彙」とはこの最後の意味におけるものとする。

語彙を構成する個々の語は、その出所起源に基づき、本来語（固有語ともいう）と外来語に分けられる。前者はその言語に固有の語、つまりその言語が成立した時代にすでに存在していた語を指す。後者は外国語から取り入れられた語を指すもので、借用語ということもあるが、「外来語」と「借用語」は区別して用いられることもある。（この問題については後述。）

今日では外国文化と全く接触を持たない孤立した社会の存在は考えられまい。そして外国文化との接触があれば、言語的にも何らかの影響を受けるのは必定で、その場合、影響は音韻・文法の面よりもまず語彙の面に出てくるものである。従って、語彙的に「純粹」とされている言語でも何がしかの外来語は必ず含んでいるもので、言語間の違いは、結局外来語をどの程度許容しているかという点に見られることになる。本稿は、この観点から現代日英語の語彙を比較し、さらに両言語の本来語・外来語について、その性格と特色、語彙全体の中で占めている位置などを比較考察しようとするものである。

## 1. 「外来語」と「借用語」

先に述べたように、ある言語の成立した時代にすでに存在していた語を本来語〔固有語〕という。これに相当する英語は native word である。これに対して、ある言語の中に、他の言語から種々の理由で侵入してきた語が外来語である。これを借用語と呼ぶこともある。「借用語」に相当する英語は loan word<sup>1</sup> であるが、「外来語」に直接対応する英語はないようである。例えば、Fromkin-Rodman (p. 292) は、ある言語の語彙は “native and nonnative words (often called loan words)” に分けられるとしている。試みに『小学館プログレッシブ和英辞典』で「外来語」の項を見ると、“a word of foreign origin; a loan [an adopted, a borrowed] word” が与えられている。英語では説明的な表現をとるところが、日本語では本来語・外来語と対句

が成立していて便利である。

さて、「外来語」と「借用語」は同義に用いることもあるが、両者を区別して用いることもある。この場合は、原語の音をほとんど変えずに自国語に取り入れた語を「外来語」といい、原語の音を自国語に合わせて借り入れた語を「借用語」という。例えば、『広辞苑』（第二版）を見ると、「借用語」はく広義では外来語のこと。狭義ではある国語にとり入れられて、全く同化された他国語と定義されている<sup>2</sup>。この区別に従えば、「PTA の会合に出席した」と言うときに、英語そのままに [pi:ti:ei] と発音すれば外来語で、ピーターエーと日本語的に発音してはじめて借用語という資格を得ることになる。しかし、「借用語」という語を用いるときに、一々広義とか狭義とか指定することは实际的でなく、混乱を招きやすいので、この区別は必ずしも一般に行われていない。上野 (pp. 66-67) が行っているように、原語そのままの形で用いられた語は「外国語」<sup>3</sup>、また原語の音韻体系から離れた形で用いられてもまだ自国語になり切っていないと感じられる語は「臨時語」・「一時語」<sup>4</sup>と呼ぶ方が妥当と思われる。以下では、「外来語」と「借用語」は同義とし、ある言語の語彙に定着した外来要素を指すものとする。但し、日本語について「外来語」と言う場合には別の問題が生じるが、これは後で述べる。

## 2. 語彙の構造

ある言語の語彙を具体的なイメージで表わすとすると、すぐに思いつくのは辞書であろう。例えば『岩波国語辞典』には見出し語が約5万7千語、『小学館英和中辞典』には約11万語が収められている。これらの見出し語は、日本語なり英語なりを話し、聞き、読み、書く上で必要な語であって、その総体がそれぞれの辞書ということになる。ふつう見出し語は、日本語の場合は50音順、英語の場合はアルファベット順に並べられているが、もとよりこの配列は便宜上のものであって、ある言語の語彙は、それを構成する個々の要素が一定の順序に従って機械的に列挙された平板なリストの構造を持つものではない。

語彙のイメージとして、樺島 (1981) は星雲のような点の集まりを提案した (図1)。星雲が語彙で、これを形作っている点の一つ一つが語である。星雲の中心部に位置する語は長い年

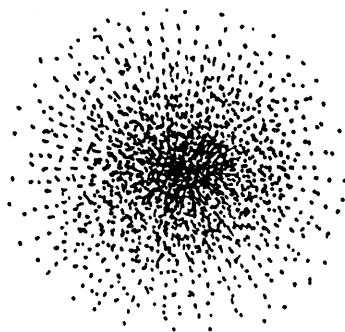


図1 語彙のイメージ

月使われてきた基本的な語で、星雲の周辺部に行くに従って、新しい語、生命の短い語が増す (pp. 13-15)。この星雲のイメージは、語彙の構造を視覚的にたくみに捉えているが、単に個々の語の生命の長短のみならず、その使用頻度にも対応していると思われる。中心部より遠ざかるにつれ、あまり使われない見慣れない語が増してくる。さらに、外国語借入の最も重要な動機の一つは自国語語彙中の欠如する語を補うためであるから、長い間広範囲にわたって頻繁に用いられてきた語の集まる語彙の基本的部分には外来語が侵入しにくいこともよく指摘される。(Robertson-Cassidy p. 149, Bambas p. 110, 樺島 p. 15 参照。) 従って、星雲の中心部に本来語が集まって語彙の核を形成し、周辺部に近づくにつれて外来語が多くなってゆくと考えられる。

### 3. 英語の語彙

#### 3.1 英語語彙の多様性

現在の世界の主要言語の中で、英語は最も多くの外来語を含む言語の一つとされている。しかも、James Murray の言葉を信ずるなら、英語がそこから語を取り入れた言語はおよそ50にものぼるといふ。(OED [旧版] 第7巻に付けられた序文参照。) 今日、英語は実質的な国際語の位置を占めていると言っても過言ではあるまいが、その原因として、言語人口の多さ・威信、広域的分布、屈折変化の単純さなどとともに、英語語彙の多様性をあげる人も多い。英語が「外来の要素を同化する並外れた能力」(Baugh-Cable p. 9) を有するとするか、「言語的消化不良の慢性症」(寺澤芳雄「語源解説」『研究社新英和大辞典』(第5版) p. xx) におかされているとするか、いずれにしても、多くの言語からの借用語を大量に語彙の中に含んでいることは、英語の大きな特徴の一つである。

さて、英語における外来語の本来語に対する比率はどのようなものであろうか。約14万語についてその起源を調査した Paul Roberts (1958) の研究<sup>5</sup>によると、英語語彙の構成は次のようになる。

ラテン語から	36%	
英語本来語	14%	
古期フランス語から	12%	} 21%
近代フランス語から	9%	
ギリシア語から	4.5%	
スカンジナビア語から	2%	
スペイン語から	2%	
イタリア語から	1%	
その他の言語から	13.5%	
出所不明	6%	

この統計から見限る限りでは、英語語彙の中で本来語の占める比率はわずか14%と驚くほど少ない。フランス語とラテン語起源の外来語の比率は実に57%である。英語はドイツ語・オランダ

語などととも西ゲルマン語派に属する言語であるが、語彙的にはラテン語（及びこれより派生したフランス語・スペイン語・イタリア語などのロマンス諸語）の属するイタリック語派の一言語であるかの如き様相を呈する。

しかし、上記の比率は、語の頻度とは無関係に、頻繁に用いられる語も稀にしか用いられない語も等しく一語と数えているので、頻度を考慮に入れると、この比率は随分ちがったものになる。例えば、ある調査によれば、語を最も頻度の高い1,000語、二番目に頻度の高い1,000語、三番目に頻度の高い1,000語…というように1,000語ずつのグループに分けた場合、それぞれの1,000語の起源は次のようになった（Williams p. 67）。

分位 (Decile)	英語 [本来語]	フランス語から	ラテン語から	デンマーク語から	その他
1	83%	11%	2%	2%	2%
2	34%	46%	11%	2%	7%
3	29%	46%	14%	1%	10%
4	27%	45%	17%	1%	10%
5	27%	47%	17%	1%	8%
6	27%	42%	19%	2%	10%
7	23%	45%	17%	2%	13%
8	26%	41%	18%	2%	13%
9	25%	41%	17%	2%	15%
10	25%	42%	18%	1%	14%

最も頻度の高い1,000語だけをとってみると、英語本来語は83%を占め、フランス語・ラテン語起源の語を合わせても13%にしかならない。しかし、次に頻度の高い1,000語では、本来語の比率は34%に減少し、フランス語起源の語が46%、ラテン語起源の語が11%と増えてくる。つまり、このような比率の逆転は、語彙の中核をなす日常よく用いられる基本的な語には本来語が多いことを示している。英語において、be, have, come, go, keep, putなどの日常的な動詞をはじめ、冠詞、代名詞、接続詞などのいわゆる機能語の大部分は本来語に属している。従って、ごく普通の文体的にあまり気取りのない文章においては、本来語の比率が高いであろうことが予測される。

そこで、一般読者向けに書かれたノン・フィクションから次の一節を見てみよう。ここは森で捕えられた一人の野生の少年の外見を説明している箇所である。

He was naked except for the tatters of a shirt and showed no  
Latin (L)<sup>6</sup>  
modesty, no awareness of himself as a human person related in  
(Old) French (OF)/L L OF L  
any way to the people who had captured him. He could not speak  
Anglo-F (AF) F

and made only weird, meaningless cries. Though very short, he  
(O) F OF

appeared to be a boy<sup>7</sup> of about eleven or twelve, with a round  
OF OF

face under dark matted hair.  
(O) F Old English (OE), Late Latin (LL)

(Roger Shattuck, The Forbidden Experiment-The Story of

the Wild Boy of Aveyron.)

延べ65語から語源不詳の boyを除いた64語のうち、本来語は51語で約79.7%を占め、外来語（ここではラテン語とフランス語起源）の比率は20.3%にすぎない。また、これらの64語のうち、『ライトハウス英和辞典』（研究社）による頻度の最も高い（中学学習程度）最重要1,000語に属するのは52語であるが、このうち7語が外来語であり、その比率は約13.5%である。これに対して、最重要1,000語に属さない12語のうち半数の6語が外来語である。短い一節であるが、使用頻度の高い基本語には本来語が多いことがよくうかがえよう。

さて、上で英語がそこから語を取り入れた言語の数が50にのぼるということにもふれたが、Robertsの調査によると、ラテン語及びフランス語起源の語に次いで多いのは、ギリシア語よりの外来語である。ギリシア語はラテン語とは本来別系統であるが、古期・中期英語に入ってきたギリシア語は、いわばほとんど全てがラテン語あるいはフランス語の中間段階を経たのであった。ルネサンス期に古典語の再評価が行われ、多くの人文主義者たちがギリシア語からも活発に借用しようとしたが、依然としてラテン語ないしフランス語を介した間接借用が多かった。従って、英語とギリシア語の間にさほどの直接的接触があったわけではないので、英語語彙に対するギリシア語独自の影響は考えにくい。

ギリシア語系の外来語に次いでまとまっているのが、スカンジナビア語（北ゲルマン語派）から入ってきた語である。この中には、一般に借用がおこりにくいとされている人称代名詞（they, their, them）や前置詞（till など）のような機能語も含まれていて、古期・中期英語におけるスカンジナビア語の影響の深さを物語る。しかし、スカンジナビア語は英語と同じゲルマン語派に属しているため、文法・音韻的に類似する点が多く、古く北欧より英語に入った語はさしたる違和感なしに英語に定着した。従って、現代英語の語彙を考える上では、スカンジナビア起源の語は本来語と対立する外来語という特徴づけは困難である。またその他の言語よりの外来語は、いずれも散発的ないしは間接的であったり、あるいは歴史的にもそれほど古くなかったりで、現代英語の語彙にまとまった独自の印象を生み出すに至っていない。

### 3.2 英語語彙の三層構造

結局、われわれが現代英語の語彙の構造を考える上で、本来語に対して特に問題となる外来語は、ラテン語及びフランス語より借用された語ということになる。これらの外来語の流入により、同じ意味を表わす本来語が廃語化することもあった。例えば、

OE hof 'enclosure, court' → court (AF)

OE earm 'poor' → poor (OF)

OE ieldo 'old age' → age (OF)

OE mennisc 'human, natural' → human (L)

しかし、本来語も存続して外来語と共存する場合も少なくなく、その結果英語は同義語の豊かさという特徴を有するようになった。ある一つ概念に対して、英語本来語、フランス語、及びラテン語起源の語という三層にわたって、同義語が見出せる場合が少くないのである。そして、個々の例外はあるにもせよ、これらの層のそれぞれの語はある共通した文体的特徴を持つと主張されてきた。Mosséの言葉を借りれば、「英語は、意味のニュアンスに応じて、語彙と文体的効果の見地から、三組一揃いの鍵盤で演奏することができる」のだ(郡司・岡田訳 p. 209)。

Baugh-Cable (p.187) は、この三つの文体的段階を、本来語—通俗的 (popular)、フランス語起源の語—文語的 (literary)、ラテン語起源の語—学問的 (learned) と特徴づけている。彼等のあげている次のような三組の同義語を見ると、

英語本来語	フランス語から	ラテン語から
rise	mount	ascend
ask	question	interrogate
fire	flame	conflagration
holy	sacred	consecrated
fear	terror	trepidation
time	age	epoch

彼等も認めているように、本来語とフランス語起源の語との間の色あいの違いはわずかであることも多いし (p. 187)、また時によっては、本来語に対して、フランス語・ラテン語よりの語が一つにまとめられる場合もあるが(上野 p. 37, Scheler (大泉訳) p. 122 参照)、全体としては、たしかに、本来語、フランス語系の語、ラテン語系の語は、それぞれある共通の文体的特徴を有していて、三つのグループを構成していると思われる。そして、すぐれた作家たちは、これらの同義語を使い分けて自らの望むところの効果をあげてきたのである。なお、外国人の英語学習者にとっては、これらの語の文体的特徴はなかなか捉えにくいものであるから、最近の英和学習辞典で試みられている「格式語」、「丁寧語」といった用法指定の導入は歓迎すべき進歩である<sup>8</sup>。

なお、言語には完全な同義語は存在しない、とよく言われるが、上記のような同義語の選択の際には、文体的観点と並んで、通常、微妙なものであっても意味の相違が関係している。The sun rose. や The flames mounted. とは言っても、The sun mounted. とは言わない。また、その語の表わしている内容の社会的位置づけの差が関係することもある。interrogate は 'question formally' であって、先生に講義の疑問点をたずねるような場合には用いられない。従って、「同義語」というより「類義語」という方が適切であるかもしれない。しかし、このような差異については本稿ではこれ以上ふれない。

ただ、ここで指摘しておきたいのは、中期英語、初期近代英語において、耳慣れないイタ

リック系の外来語を説明するため、類義の本来語を並べる冗語表現があったことである。例えば、次のような例が見られる。

Chaucer     my herte and my corage  
                     OE                      OF  
                     time and space  
                     OE                      (O) F  
                     huntynge and venerye  
                     OE                      (O) F

The Book of Common Prayer

to acknowledge and confess  
 ((廢)) acknow (OE) (O) F  
 + knowledge (late OE)

I pray and beseech you  
          OF                      OE

Shakespeare by leave and by permission  
                     OE                      (O) F/L

dispersed and scattered  
 (O) F                      ME (語源不詳)

the head and source  
          OE                      OF

しかし、今日では、このような冗語表現は、当初の目的は忘れられて、単なる装飾的なものとなり、同義語を並べる修辞上の技巧と受けとられている<sup>9</sup>。

### 3.3 文体と語彙

英語語彙の多様性は、微妙な意味の差異を表現し、また文体・文の調子を自在に変えることを可能にした。前に述べたように、頻度の高い基本的語彙に本来語が多いが、一般にこれらは日常語的であり、より個人的な、より強く感情を帯びた語と感じられる。抽象的・文学的語になると、ラテン語・フランス語起源の外来語が増えてくるが、これらは概してより客観的で、より重々しい感じを与える。そして、この差異には、一般に、本来語に単音節、イタリック系外来語に多音節の語が多いことが関係していることもよく指摘される。

次の一節は、ハムレットがまだ父の復讐を果していないことを恥じる場面である。

...I do not know

Why yet I live to say 'This thing's to do,'

Sith I have cause, and will, and strength, and means  
 To do't.                      (O) F                      (4. 4. 43-6)                      AF

ここに用いられている語は全て単音節である。そして cause, means 以外全て本来語である。これらの語が素朴で力強い調子を生み出すのに貢献している。これに対して、次のマクベス夫人の独白には多音節語が多用されている。

Come, you spirits .../unsex<sup>10</sup> me here, ...  
          AF                      (O) F/L

Make thick my blood;

Stop up th'access and passage to remorse,  
OF (O) F OF

That no compunctious visitings of nature  
OF/LL (O) F/L (O) F

Shake my fell purpose ... (1. 5. 41-7)  
OF

これはハムレットの独白に比べると、荘重で公式的な印象を与えるが、それにはイタリック系の多音節語の存在が気づかっているのである<sup>11</sup>。

このように、本来語や外来語の使い分けは、作家たちにさまざまな文体的可能性を提供したが、また同時に多音節で重量感のある外来語を多用すれば、さしたることでなくてももっともらしく聞こえることにもつながり、弊害もおきている。

Williams (p. 148) は「親密的」(intimate) と「公式的」(formal) という文体の両極を設定し、それぞれを構成する語の分類に関して、以下の図式を示している。

比較的親密的	比較的公式的
固有要素	フランス語, ラテン語, ギリシア語からの借用語
刈込語 (clips) と複合語	完全形とわずかの複合語
非派生 (underived) 形	派生度の強い形

そして、「親密的」と「公式的」文体の例として次の二文をあげている。

1. I think I'll cut 'cross the quad back t' the dorm'n  
hit the books for the psych final with my roomie.
2. My decison is to traverse the quadrangle to return  
to the dormitory to study for my psychology final  
examination with the individual with whom I share a room.

これは論点を明らかにするために誇張された例で、伝えられている内容に対して例文(2)の文体がそぐわないのは明白である。しかし、たしかに、同じことを言うにしても(2)のような文であれば、何かしらもっと重要な内容であるかの如き錯覚が生まれやすい。ひいては話し手(あるいは書き手)の威信を助長することにもつながる(と感じられる)ので、(2)ほど馬鹿馬鹿しい文ではないにしても、日常的な語の簡潔な表現(Mind the step. 全て本来語)よりもイタリック系外来語を含む重々しい表現(自動車道路で Caution traffic entering from left.)を好む風潮は至るところで見られるのである。(O) F Middle F (O) F

「公式的」文体は、官僚が日常業務の中で多用するところから、いわゆる「官庁用語〔語法〕」(official jargon, officialese) という表現が生まれた。Eric Partidge によれば('Vigilans' pp. 19-20), 官庁用語の主な特徴は、婉曲語法、回りくどく引き延ばした言い方、などとともに、「短い語の代りに長い語を、具体的な語の代りに抽象的な語を、親しみのある語の代りに見慣れない語を、本来語の代りにラテン語(ときにはギリシア語)系の外来語を使うこと」で



ある。get, buy ですむところを acquire, purchase と言い, say, write, tell では平易すぎるから communicate (with) と言い, needs よりは desiderata の方がもっともらしくてよからう, というわけである<sup>12</sup>。

### 3.4 まとめ

英語はその歴史の初めから多くの語を外国語より取り入れてきた。外来語の使用の是非に関する論争は古くから繰り返されてきた。今, その詳細に立ち入る余裕はないが, 古期英語以来の本来語は, ラテン語・フランス語起源の語より直截的で質実・力強いとして, 何が何でも本来語のみを使うべき, という立場も, また逆に英語本来語は未熟で洗練されていないので, 単なる日常生活の最低の要求以上の高尚な思想・概念を表わすためには, ラテン語・フランス語起源の語の方がいかなる場合にも適している, という立場も, あまりにも一方に偏しすぎている。言語には単純・素朴な語も, 洗練された上品な語も, また難解・抽象的な語も必要なのであって, それぞれのグループの特色を認め, 適材を適所に生かすことが最も重要なのである。

## 4. 日本語の語彙

### 4.1 日本語における「外来語」

英語と同じく, 日本語も現代に至るまでさまざまな外国語から語を借用してきた。この点で, 両言語は, 外来語の少ない中国語, ドイツ語, フランス語などと対照的である。ほかに朝鮮語(中国語から), ペルシア語(アラビア語から), トルコ語(アラビア語とイラン語から)なども外来語を多く含むとされている(金田一 p. 20)。さて, われわれは現代英語の語彙構造を考える上で, 英語本来語, ラテン語系, フランス語系外来語の三層構造を問題にした。日本語語彙においても三層構造が考えられるのであるが, 「外来語」という語の指す範囲に関して英語のときとは少し異った問題が生じる。これは後でふれることにして, まず日本語における外国語からの借用語の歴史を概観することとする。

5-6世紀の中国文化との接触以後, 中国語から多くの語が流入した。これらの中国語起源の語を漢語というが, 中国語からは語のみならず漢字まで輸入され, 真の中国語由来の語にならった和製漢語が多量に造られた。通常これらも含めて「漢語」というが, 中国語から直接取り入れられた語に限らない, という意味から, 「漢語」という名称を避け, 「字音語」と呼ぶこともある。しかし, ここでは一般に使用されている「漢語」という名称を用いることにする。

他のアジアの言語から取り入れられた語としては, 朝鮮語から入ってきた語(パッチくずばん下>, メンタイ<すけそうだら>, オンドル<一種の暖房>など), 主として中国語を経て入ってきた梵語, 即ちサンスクリット語, 起源の語<sup>13</sup>(卒塔婆, 旦那, 涅槃など, いずれも原音に近い漢字をあてた音訳)なども存在するが, これらは日本語語彙の中で量的にも少く, また意味的にも朝鮮独特の事物や仏教関係の概念などにかたよっていて, 日本語語彙全体の中では周辺の位置にあると考えられる。

日本語のヨーロッパ語との接触は, 16世紀半ばのポルトガル人の種子島漂着に端を発する。これ以後始まったキリシタンによるキリスト教の伝道と南蛮貿易により, ポルトガル語(バテ

レン<神父>, クルス<十字架>, パン, タバコなど), スペイン語 (シャボン, メリヤスなど, いずれもポルトガル語よりもいう) より外来語が入ってきた。17世紀初めに鎖国令が出てからは, ヨーロッパ諸国の中ではオランダのみが交易を許されたため, オランダ語からの外来語 (ガラス, コック<料理人>, ビール, ペンキなど) が増えることになった。幕末になってから英語・フランス語, ついで明治になってからは, これらの他にドイツ語・イタリア語などから多くの外来語が入ってきたが, 明治以後, そしてまた特に昭和20年の敗戦以後は, 圧倒的に英語よりの借用が多い。これらのヨーロッパ語から取り入れられた語を通常「(西) 洋語」という。

さて, 上に述べた外国語から取り入れられた語に対して, 古代日本語にすでに存在していた語, あるいはそれらに基づいて後代に造られた日本語固有の語は, 「和語」といい, ときに「やまとことば」ということもある。先に外来語を外国語から取り入れられた語と定義したので, この定義からすれば, 日本語語彙を構成する語のうち, 和語以外は漢語も洋語も全て外来語ということになる。しかし, 漢語は日本で長く使われ, 量的にも多く, しかも漢字まで日本の文字となってしまったので, 16世紀以後日本語に入ってきて, しかも通常カタカナで表記される洋語に対して, 漢語は外国語から借用した語という意識が薄れてしまった。そこで, 日本語の語彙を語るときは, 漢語は特別扱いをして, 「外来語」は主として洋語, つまりヨーロッパ語系の借用語を指すのに用いるのが慣例である。

なお, 洋語もさらに細かく最も初期のポルトガル語系, 次に古いオランダ語系, 及び幕末・明治以後の英語系と区分できる。しかし, 日本語への同化の程度については各グループ毎の特色が考えられるが, 語彙全体の中で和語・漢語に対して占める位置, 文体に与える影響などの観点からは, このような細かな区分をこえて一つにまとめられる。結局, 日本語語彙は和語・漢語・洋語〔外来語〕の三層構造において捉えられることが多い。偶然とはいえ, 英語語彙の三層構造に対応している点, まことに興味深い。

次に問題となるのは, われわれが英語について考察した, 語彙の基本的部分に本来語が多く, 周辺部に近づくほど外来要素が増加する, という現象は, 日本語にもあてはまるか, ということである。参考資料として, 国立国語研究所のよく知られた雑誌語彙の調査 (国立国語研究所報告21『現代雑誌九十種の用語用字 (1) 総記および語彙表』1962;同報告25『同 (3) 分析』1964)<sup>14</sup>を見よう。調査対象として選ばれた雑誌 (1956年刊行分) は5部門 (層) (1. 評論・文芸, 2. 庶民, 3. 実用・通俗科学, 4. 生活・婦人, 5. 娯楽・趣味) 90種で, サンプルの延べ語数約53万, 異なり語数約4万 (延べ・異なり語数とも人名・地名を除く) について調査が行われた。

この調査によると, 異なり語数の場合は, 漢語47.5%, 和語36.7%, 外来語〔洋語〕9.8%, 混種語<sup>15</sup>6.0%で, 漢語の方が和語よりも高い比率を占めている。ところが, 延べ語数の場合は, 和語53.9%, 漢語41.3%, 外来語2.9%, 混種語1.9%となり, 漢語と和語の比率が逆転し, 和語の方が多くなる。つまり, 和語は, 種類は少くとも頻繁に用いられ, 漢語は, 種類は多くても和語に比べると使用回数の少い語が多い, ということになる。

このことは次の図がよく示している。

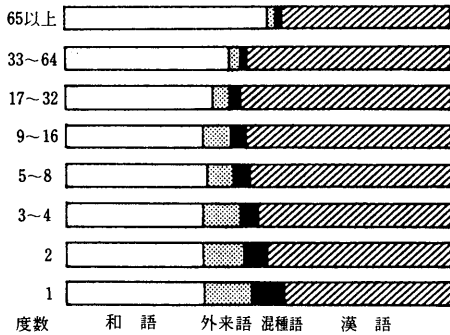


図2 度数別にみた語種<sup>16</sup> (異なり語数)

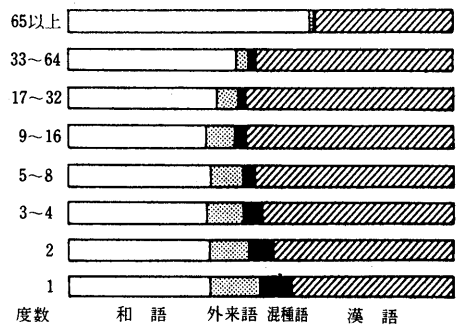


図3 度数別にみた語種 (延べ語数)

異なり語数の場合、全体では和語より漢語が多いが、図2によると、これは使用度数64以下の場合であって、使用度数が65以上の語ではやはり和語の方が多い。また延べ語数の場合、全体では和語の比率が高いが、図3の示すように、使用度数が65以上でのみ和語は漢語より多い。つまり、頻度の高い語においては、異なり語数であれ、延べ語数であれ、和語の占める比率の方が高い。これは和語が漢語に比べて基本的な語彙であることを意味する。以上のように見てくると、語彙の基本的部分は本来語で占められ、外来語が侵入しにくいという現象は日本語にもあてはまるのである<sup>17</sup>。

#### 4.2 日本語語彙の三層構造

英語はゲルマン系であるが、イタリック系の外来語が多量に流入し、その結果同義語がふえ、特に本来語、ラテン語系、フランス語系の語の三層にわたって同義語が見出せる場合が少なくない。そしてこれらの各層の語にはある共通した文体的特徴が結びつけられる、と考えてきたのであるが、同様のことが日本語語彙における和・漢・洋の三層にも見出せるのである。

例えば、次の例を見てみよう。

和語	漢語	洋語
めし	御飯	ライス
宿屋	旅館	ホテル
みち	道路	ロード
受け取り	領収書	レシート
いいなづけ	婚約者	フィアンセ
歌い手	歌手	シンガー
かたち	形態	フォーム
食べ物	食物	フード

洋語は、西洋風のもを在来の日本のものと区別するために用いられることがある。例えば、レストランで客に出す皿に盛った御飯が「ライス」であり、西洋風の設備様式を整えた宿泊設備が「ホテル」である。しかし、これだけでは説明できないニュアンスのちがいが存在する。和語と漢語が同じ意味分野にあるとき、一般に和語は日常語的、漢語は文語的である。洋語は

このようなかたよりはないが、同義の和語漢語と比べると新鮮でスマートな感じを持つことが多い。従って、各層の同義語は、連語構成上の可能性が異なることが多く、例えば演歌の「歌い手」ならしっくりきても、オペラとなるとやはり「歌手」がすわりがいいし、山中の「けものみち」に対して「道路」はおかしく、「高速道路」や「(自転車の)ロードレース」という使い分けがなされるであろう。

漢語は古くから日本語に取り入れられてきたが、明治まで漢文漢語は武士などの一部の知識階級のもので、一般の人々にはあまりなじみがなかった<sup>18</sup>。しかし、明治維新後は、大量の文物・学問の輸入にあたって、これを表すために多くの漢語が造られた。例えば、「科学」「印象」「客観」「議会」「義務」などの今日のわれわれにとってごく当たり前の語も、幕末・明治以後にできた新語である。(樺島 p. 49)。これは漢字の造語力が豊かであったために他ならない。漢字は表意文字であるから、これを組み合わせることにより新語が簡単に生み出せるのである。この点は、英語においてもラテン語(及びギリシア語)からの接辞の造語能力が、種々の専門的術語を生み出すことに貢献していることとよい対照をなす。

さて、漢語は、日常語的な和語に比べて、一般に文語的で堅い感じとされている。英語本来語に単音節語が多く、イタリア系外来語(特にラテン語系)に多音節語が多いことは前に述べた。この場合は、語の長さが重量感を生み出し、荘重なまた堅苦しい感じにつながるのである。和語と漢語の場合は、必ずしも長さについて一般化はできない。例えば、音節という術語を日本語にも用いるとすると、「めし」―「御飯」においては、漢語の方が音節数が多く、「歌い手」―「歌手」においては、漢語の方が音節数が少ない。これは和語の音節数は、「みち」「かたち」「きびしい」「やわらかい」などとさまざまで、典型的音節数が定めにくいのにに対して、漢語は漢字二字から成るものが最も多く(松井 p. 153)、しかも漢字は表意文字であるため、「道一路」「旅一館」の如く形態素に切れ、それぞれの形態素は一音節ないし二音節に限られているからである。また漢語には促音・拗音・長音などが多いこと、二音節目に来る音はイ・キ・ク・チ・ツ・ン・ウの7種の音に限られている(松井 pp. 152-53)などの特徴的音結合があり、例えば「らんしゅん」という語があるとなれば、それは漢語である可能性が強い。このような特徴的音形と画数の多い漢字表記の視覚的印象が、ひきしまった堅い感じを漢語に与えているのであろう。

また、和語であれば、大学・会社・病院・学習塾など全て「入る」で片づけられるのに、漢語の場合は「入学・入社・入院・入塾(する)」と使い分けられ、細かいニュアンスや精密な意義の差を表わすことができるというわけで、漢語は日常的なこなれた和語より何かしら高度な内容を伝えるかの如き錯覚が生じるのである。この点で、漢語は日本語語彙の中で、英語語彙における多音節の重々しいラテン語系外来語のような位置を占めていると考えてもよからう。

従って、官庁文書に漢語が多いのも当然の成り行きであろう。日常の言語ではまず目にかからない「過般」「具申する」「思料する」「小職から」といった言い回しの氾濫である。住民の「うまい地下水を守れ」という要求をうけて、町議会は「地下水保全並びに採取の適性化に関する条例」制定の是非を審議し(昭61. 10. 7『朝日』夕刊)、幼児を車に乗せるとき座席

に取りつける装置は、通産省用語では「自動車用幼児拘束装置」、運輸省用語では「年少者用補助乗車装置」、警察庁用語では「幼児用補助乗車装置」と言うそうだ（昭61. 10. 11『日経』夕刊）。最近かかる形式化した堅苦しい官庁用語に対する見直しがあちこちで行われはじめた（『言語』（1986. 1月号）総合特集「ことばの行革—平易な日本語をめざして」参照）。ここで思い出されるのは、千葉県松戸市の松本市長の創始した「すぐやる課」である。名づけ親の市長がこの名称を言い出したとき、会議の席でいっせいに、これではカッコ悪い、役所らしくない、名刺に刷りこめない、などの反対論が出て、代りに漢語を用いた「機動処理課」「応急処理課」、あるいは（和製）洋語を用いた「スピードサービス課」といった案が出たが、市長は子供でもわかるこの名称を主張し通したという（同書 p. 109）。長年の意識・習慣の変革には時間がかかりそうであるが、官庁用語の平易化の運動は是非根気よくおしすすめてほしいものである。

やさしいふつうの言葉で言えるところをことさら難しい語を使いたがるのは、日本語のみならず英語の官庁用語でも同じことは、上で見たとおりであるが、平凡な内容をこけおどかしの多音節外来語で表わして、偉そうにひびかせる術学者（pedant）の語り口は Shakespeareの劇の中で痛烈に皮肉られている。

例えば、『お気に召すまま』から次の一節をみよう。

Therefore, you clown, abandon (which is in the vulgar,  
OF  
leave) the society (which in the boorish is, company<sup>19</sup>  
OE (O) F OF  
of this female (which in the common is, woman); which  
(O) F OE  
together is, abandon the society of this female, or,  
clown, thou perishest; or, to thy better understanding,  
(O) F  
diest. (5. 1. 52-7)  
?OE□?ON

ここに見られる語感の相違を表わすために、坪内逍遙は和語と漢語を使い分けて翻訳している。（上野（p. 40）の指摘による。）

だから、その方如き農夫はよろしく断念しろといふんだ。俗語でいへば、止せ……交際  
際することを……田舎言葉で言や、つきあふのを……この婦人と……婦人といふのは  
女といふことだぜ。それをみんな寄せると、「この婦人と交際することを断念しろ」  
となるんだ。「でないと農夫、落命に及ぶぞ。」それをもっと分かるやうにいふ  
と、命が無いぞ。

最近の小田島雄志訳（1983（白水Uブックス21））においても、原文のイタリック系外来語と本来語のニュアンスのちがいは、やはり漢語と和語の使い分けにより表わすという方策がとられている。

だからだな、田吾作どん、この女性との——俗に言うと女との——交際を——田舎ことばで言うつきあいを——放棄するんだな——下世話で言うやめるんだな、以上をまとめて言えば、この女性との交際を放棄するんだな、さもないと田吾作どん、おまえは破滅だぞ、もっとおまえにわかるように言えば、死ぬことになるぞ……

### 4.3 洋語の氾濫

明治時代になってから、英語を中心とするヨーロッパ語からの借用が急速にすすんだが、この時代ではまだ漢語の増加の方が圧倒的であった。しかし、大正・昭和時代になると、洋語が漢語を追いぬくことになる（上野 pp. 88-89）。戦時中の一時期には、英語は敵国語だから使ってはならぬと禁止されたが、昭和20年の敗戦以後は、再び大量に流入するようになった。特に最近の洋語（特に英語、和製英語も含めて）の氾濫は著しい。前述の国立国語研究所の雑誌語彙調査によると、外来語〔洋語〕異なり語数2964語のうち、英語を原語とするものが約81%、続いてフランス語5.6%、ドイツ語3.3%、イタリア語1.5%、オランダ語1.3%等となり、英語由来の外来語が圧倒的に多い（松井 p. 162）。以下は主として英語系の洋語について論じる。

近年、生活の洋風化に伴い、洋語が背景に持つエキゾチックなムードに魅力が感じられ、さらに非和語・漢語的音形が与える新鮮・スマートなひびきが好まれて、新しい洋語がどんどん取り入れられている。

シェイプアップ ワイングラス  
アメリカン(コーヒー) ユーザー  
(為替)レート トリートメント (毛髪)

また、もともとあった和語や漢語が洋語に変えられるケースも多い。

くだもの→フルーツ 若者→ヤング  
まほうびん→ポット ぶどう酒→ワイン  
開店・開場→オープン  
取り消し→キャンセル

「くだもの」と言えば、柿やりんごなど従来からある伝統的種類が連想され、「フルーツ」と言えば、最近多量に出回りはじめたキーウィ、パパイヤ、マンゴなどなどの新しい種類が連想されるかもしれない。「まほうびん」「ぶどう酒」なども、若い世代の間では最近ほとんど用いられないのではないか。また原語の意味がはっきり認識されないところが、かえって明示的露骨な表現を婉曲なものに変える効果を生むこともある。

借金→ローン 減量食→ダイエット  
妊婦服→マタニティドレス  
賃貸(借り) →レンタル

しかし、一般的には、このような洋語の氾濫は、語彙の基本的部分に侵入しているとは考えられず、周辺部でおこっている現象で、洋語使用の是非についての活発な議論にきっかけを与えている程度のことである。

但し、全ての人に正しく理解してもらい、その上で評価を受けるべき政府や自治体での用語・文章に、「なんとなくカッコいい」「ハイカラな感じがする」「予算獲得に威力を発揮する」などの理由で、安易にカタカナ外来語（和製のものも含めて）が増えている（昭61. 8. 24『日経』朝刊）のは、大きな問題である。郵政省の「テレトピア<未来型コミュニケーションモデル都市>」事業、建設省の「シェイプアップ・マイタウン<地方都市再活性化>」計画、神戸市の「ポートアイランド・ファッションタウン<人工港島ファッション産業街づくり>」事業など枚挙にいとまがないが、こういった名称が一般の国民に容易に理解されるものかどうかおおいに疑問である。なお、英語において、見慣れぬ外来語に対して同義の本来語を並べる修辞上の工夫があったことは前に述べたが、日本語においても、上記の如き難解なカタカナ外来語に対して、行政官庁よりはわかりやすさを重要視している（と思いたい）マスコミ側は、できるだけ言い換えるか、前後で説明を加える、などの努力をするようである。例えば、ある（テレビ?）地方局のニュースで、「テクノポリス事業」を取り上げた際に、「先端技術産業と研究機関と住宅地域とを一体化した、いわゆるテクノポリス」という注釈を付けて、この語の定着をはかったという（最上 p. 68）。ひとりよがりのカタカナ外来語は、難解な漢語と同じく、国民の理解を拒絶する元凶である。官庁用語平易化運動の一環として、和語・（難解すぎない）漢語でどうしても言い換えができない場合は別として、安易なカタカナ語の使い過ぎは是非再考してほしいものである。

#### 4.4 まとめ

以上、日本語の語彙は、和語・漢語・洋語の三層構造をなすと考えられることを見てきた。語彙の基本的部分は何語が占めるが、漢語の借用の歴史は古く、漢字が取り入れられたせいもあって、頻度の高い漢語は全く違和感なく用いられている。難解漢語の乱用は避けられねばならないが、そのすぐれた造語力の故に、漢語の使用はこれからも当然必要である。また、英語を中心とする洋語の大量使用も、世界がいよいよ狭くなり、物心両面の交流が一層盛んになってきた今日、これを止めることはもはやできない。われわれの言語生活の多層化は今後強くなってゆくことはあっても、弱まることは考えられまいから、不必要な洋語・難解漢語の使用を避け、起源の異なる各層の語の文体的特徴を適所に生かすことを心がけてゆくべきである。

## 5. 結び

ある言語の語彙を構成する個々の語は、その出所起源に基づき、本来語と外来語に分けられる。同一のわく組みで行われた統計がないため、正確な比較は不可能であるが、現代日英語はともに外来語を多く含み、異なり語数では本来語よりも外来語の方が多いと考えられている。しかし、頻度を考慮に入れると、頻度の高い語においては日英語とも本来語が多い。大まかに言って、語彙の基本的部分は何語で占められ、語彙の周辺が外来要素に浸蝕され、外来要素のあるものは少しずつ語彙の内部に浸透してゆき、またあるものは語彙に定着することなく消えてゆき、時代時代でそれぞれの均衡を保ちながら、しかも全体として動いてゆくものと考えられる。現代日英語の語彙は、過去の長い歴史の中での外国文化との接触の結果、外来語が数

多く流入し、これらの外来語と本来語が、あるときは共存し、あるときは一方が他を駆逐しながら、時代の淘汰を経て、到達した体系なのである。

さて、ある一つの言語より取り入れられた語がかなりの量にのぼるようになると、借用の外面史的環境とあいまって、語彙の中に一つの層を形成し、文体的に一つのまとまった印象を持つようになる。英語語彙については、本来語に加えて、フランス語系、ラテン語系外来語をあわせた三層構造を論ずることが一般に行われている。これらの層は、それぞれ、通俗的口語的、文語的、学問的という文体的特徴を持つと考えられ、この三層にわたって同義語が見出せることが少ない。そしてすぐれた作家たちは、これらの同義語を使い分けて自らの望む効果をあげてきたのである。

日本語語彙の構造については、一般に和語・漢語・洋語の三層構造が論じられている。文体的には、和語は日常語的、漢語は文語的、と感じられるが、これらはほぼ英語語彙における本来語とラテン語系外来語の位置を思いおこさせる。洋語は他の二層ほどはっきりした印象を持たず、文体的には中立であるが、最近の官庁用語における（難解）洋語の氾濫ぶりは、ある意味で英語の官庁用語におけるラテン語の多用に通ずるものである。なお、漢語も洋語も外国語から取り入れられたという点で、どちらも外来要素であるが、漢語は、洋語と比べて、借用の歴史も古く、しかも漢字も取り入れられたので、あまり違和感を持たれない。従って、漢語は日本語語彙を語る際には外来語として扱われないのが普通である。

英語において外来語の使用の是非に関する論争は古くから活発に行われ、また最近の日本語のカタカナ外来語の氾濫に対してもさまざまな議論が行われている。これらの議論はややもすると一方に偏した極論となりがちである。いかなる社会といえども、外国文化との接触は今後ますます増えることはあっても減ることは考えられないのであるから、不必要な外来語の使用は避けねばならないが、起源を異にする語の文体的特徴を適所に生かしてわれわれの言語生活を豊かにしてゆくべきである。

## 註

1. この語自体がドイツ語 *Lehnwort* の翻訳借用である。
2. この定義は、第三版では<或る体系・位相にとり入れられ、全く同化されて日常的に用いられる外国語・古語・方言など異なる体系・位相の語。外来語と同じ意味に使うこともある>と改められている。
3. 但し、この語は文脈によっては *foreign word* ではなく、*foreign language* を指すので、厳密には「外国の語」といった生硬な表現が必要かもしれない。
4. *The Shorter Oxford Dictionary* は、一時的に用いられた語の前にII印を付ける方策を講じている。
5. Roberts, Paul (1958) *Understanding English*. 以下の統計は宇井 (p. 6) より引用した。Robertsの本は多くの英語語彙の研究書に引用されているが、この本を入手することは不可能であった。
6. 以下、英語の語源は『研究社新英和大辞典』（第5版）による。無指定の語は英語本来語である。
7. ME *boie* 'male servant, slave'. AF \**abuié*, \**embuié* の頭音消失形とされることもあるが、OEの男子名 *Boia* と結びつけられることもあり、ME *boie* の語源は定かでない。
8. ちなみに、上記の *Baugh-Cable* の例のうち、『ライトハウス英和辞典』（研究社）によると、*mount*, *ascend*, *interrogate*, *conflagration* が「格式語」の指定を受けており、*trepidation* は見出し



- 語として採録されていない。
9. 上野 (p. 37) は、日本語における「<sup>つどがほ</sup>転宿」「<sup>ありさま</sup>光景」「<sup>たてもの</sup>建築物」(いずれも島崎藤村『破戒』より)のように、漢語に和語のふりがなを付ける方策を同巧のものとして引用している。
  10. イタリック系の sex に本来語の接頭辞 un- がついた形で、このように異なった言語の要素によって形成されている語を混種語 (hybrid) という。
  11. この二つの引用は、本学における「Shakespeare の英語」と題された講演 (1986年10月24日) において、Holloway 教授が、単音節語より成る “powerful and simple” な文、及び多音節語を多く含む “formal and dignified” な文、の両極の例としてあげられたものである。但し、同教授はこの箇所の語の出所起源の違いには言及されなかった。
  12. このような官庁用語に対して、米国テキサス州の共和党員 Maury Maverick は、gobbledygook という実にぴったりした語を造った。Partidge によれば (‘Vigilans’ p. 16), これは ‘gobble of the turkey cock’ の転訛である。雄の七面鳥の歩くさまがいかにも気取ってみえるのと、堅苦しくてわかりにくい官庁用語の羅列はたしかに七面鳥のごろごろいう鳴き声に似ていなくもない、というところをたくみに組み合わせた造語である。
  13. サンスクリット語は言語系統的にはインド・ヨーロッパ語族の一言語であるが、地域的には古代インドの雑語であり、またこれらの語の多くは中国語経由で入ってきたことから、後で述べるヨーロッパ語系の外来語とは通常区別される。
  14. この実物を入手することができなかつたので、以下は松井 (pp. 161-63)、金岡 (pp. 386-90) における紹介に基いている。
  15. 「プロ野球」「安月給」のように洋語・漢語・和語の異種の要素が入り混じって一語をなすもの。註10. 参照。
  16. 「語種」とはわれわれがこれまで用いてきた語の起源による分類をいう。
  17. 上野 (pp. 33-34) は、英語におけるゲルマン系及びイタリック系の語彙の絶対数と相対数の関係が日本語の和語と漢語の関係に比べられることを指摘している。
  18. 英語に取り入れられた日本語の例としてよく引用される語に「ハラキリ」がある。しかし、この語は今日の日本語では、「幹部は腹切りもの」といった比喩的用法、または「腹を切る」といった動詞表現で用いられることはあっても、一般にはむしろ漢語の「切腹」の方が定着している。上野 (pp. 43-60) は、「ハラキリ」が英語へ借用される過程を調査して、黒船を率いて日本に來航したペリー提督の遠征記録にこの語が見られることを発見した。漢語の一般語彙への大量流入は明治時代になってからのことであるから、幕末の頃には、一般町人階級などの間で「ハラキリ」が現在と比べてはるかに頻繁に使われていて、直接日本の土地を踏んだアメリカの海軍軍人たちがこの語を耳にしたのではないかと主張している。江戸時代からそのまま持ち越した相撲の決まり手の名称に、「勇み足」「打っちゃり」「肩すかし」など和語が多いという指摘 (p. 50) とともに非常に興味深い。
  19. society, company はともにフランス語起源の語であるが、〈交際〉の意味では society の方が格式語である。society の文献初出が (1531) で company (? C 1225) より遅く、また借用源であるフランス語の起源が前者はラテン語、後者は俗ラテン語であるということが、両者の文体的差に関係しているのであろう。

#### 参考文献

- Bambas, Rudolph C. (1980) *The English Language*, University of Oklahoma Press.
- Baugh, Albert C. and Thomas Cable (1978<sup>3</sup>) *A History of the English Language*, Prentice-Hall, Inc.
- Fromkin, Victoria and Robert Rodman (1983<sup>3</sup>) *An Introduction to Language*, Holt, Rinehart and Winston.
- 石綿敏雄 (1971) 「現代の語彙」『語彙史』(講座国語史 3) 大修館書店 pp. 345-411.
- 樺島忠夫 (1981) 『日本語はどう変るか—語彙と文字』岩波新書。

- 金岡孝 (1977) 「語彙研究の歴史」『語彙と意味』(岩波講座日本語 9) 岩波書店 pp. 371-404.
- 金田一春彦 (1957) 『日本語』 岩波新書.
- 松井利彦 (1982) 「漢語・外来語の性格と特色」『日本語の語彙の特色』(講座日本語の語彙 2) 明治書院 pp. 149-177.
- 最上勝也 (1986) 「官庁カタカナ語の氾濫」『言語』(1月号総合特集・ことばの行革) pp. 60-69.
- 森岡健二 (1982) 「語彙の歴史の中の現代語彙」『語彙史』(講座日本語学 4) pp. 1-27.
- Mossé, Fernand. (1963) 『英語史概説』(郡司利男・岡田尚訳) 開文社出版.
- Robertson, Stuart and Frederic G. Cassidy (1954?) *The Development of Modern English*, Prentice-Hall, Inc.
- Scheler, Manfred (1986) 『英語語彙の歴史と構造』(大泉昭夫訳) 南雲堂.
- 上野景福 (1985) 『英語語彙の研究』(改訂増補版) 研究社出版.
- 宇井英俊 (1985) 『日英両語における外来語, 借用語』ほおずき書籍.
- 榎垣実 (1963) 『日本外来語の研究』研究社出版.
- 'Vigilans' (1952) *Chamber of Horrors*, Andre Deutsch.
- Williams, Joseph M. (1975) *Origins of the English Language*, The Free Press.

原稿受理 1986年12月1日